妙の光（たえのひかり）

通刊47号 **復刊26号**
1999年6月25日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025

雉子（キジ）

境内の籔に巣があるらしく、色鮮やかな姿を毎日のように見かける。ケーン、ケーンという独特の鳴き声も耳に馴染んだ。以前、寺の近くに県営の養殖場があって、狩猟目的で成鳥を放していたが、寺の周辺が禁猟区でよけい増えたらしい。

初夏のころ、つがいで三羽、四羽の雛を引き連れ、道路を渡るほほえましい姿がよく見られる。「焼け野の雉子、夜の鶴」という諺があって、古来から子を思う心のあつい鳥として、古典詩歌に多く詠われているという。野火のなかで、子を守って自らが焼け死んださまを言うと辞書にあった。忘れ去られるような言葉で、心を置き去りにしたかのような現代社会に思いをはせた。

その一方で畑の農作物を食い荒らして、農家の被害が大変だと聞いた。自然との共生は難しい。

寺の湯に音つつしめば雉子鳴けり　大野林火

お盆の由来

小川英爾

カンダターという男がいた。筋骨たくましく知能も優れていたが途方もない悪人で、世の中の悪事の限りを平気でやってのけた。その罪で焦熱地獄におちて大変な苦しみを受けていた。その苦しみは彼の豪胆な精神力と強靭な体力をもってしても耐えきれるものではない。彼は過去の罪悪を後悔し、もう一度人間の世界に戻ることができたら、罪滅ぼしに社会の人のため尽くしたいと心底から決心した。

この様子をご覧になったお釈迦さまは、一本の蜘蛛の糸を地獄に下ろされた。この糸を見つけたカンタダーは、溺れる者が藁をもつかむ思いでつかまった。不思議にも糸は強くて切れない。そこで上へ上へとよじ登っていった。人間界へ帰れる希望と地獄界から抜け出た喜びに、精いっぱいの力で休むことなく登り続けた。何十時間か登り続けたとき、ふと下を振り返って見下ろすと、あの苦しかった地獄はもう遙かにかすんで見えない。ところが自分の下に、地獄で一緒に苦しんだ大勢の仲間が数珠のように繋がって登ってくるではないか。この細い糸にあんなに大勢つかまっては切れるに違いない。そこで「おーい降りろ。この糸は俺のもんだ。降りないと蹴落とすぞ」と、下に向かってどなった。とたんにカンダターの手元で糸が切れて、再び地獄へまっさかさまに落ちていった。

芥川龍之介の小説『蜘蛛の糸』を思い起こす人が多いと思うが、もともとはお経に書かれている有名なたとえ話だ。修業によって自分だけが救われるのでなく、自らを高めるとともにこれを多くの人に伝え、ともに幸せになろうという教えが込められている。法要の最後で「願以此功徳（がんにしくどく）・・・」という言葉をよく耳にされると思うが、このことを言っている。じつはこれが、今年も近づいた「お盆」の本来の意味であることが忘れられてしまっている。

またお経のなかの話だが、お釈迦さまの弟子の目連さんは、大変な修業と努力によって不思議な洞察力（見通す力）を得ることができた。母思いだった彼が、ある日亡き母の行方を探したところ、なんと餓鬼の世界に落ちて食べ物に不自由して苦しむ姿が見えた。早速母を救おうと食べ物を届けたが、それが火になって燃え上がり、母を火傷させて苦しめる結果になる。そこで自分の力では救えないと、お釈迦さまに教えを乞うた。

「お前の母親は欲張りで、他人に施すこともしらない意地悪な人間だったから餓鬼界すべての霊を招き、百種類の飲食物を供え、大勢の坊さんや人々、動物まで呼んで供養しなさい」とお釈迦さまは説かれた。目連さんがその通りにすると、母やその他の餓鬼までが救い出されるのが見えた。目連さんが喜びのあまり、棚の回りを踊り回ったのが盆踊りの始まりとか。

このようにお盆の行事は、目連さんの話に由来する。本来は自分の先祖に限らず、生きとし生けるものすべての幸せを祈り、他への供養がその具体的な行ないである。昔はお盆のお供え物を川や海に流していたが、それは魚への供養の意味があった。目連さんはこうした修業で自らが仏となり、母を救うことができた。お盆の本来の意味、そして仏教の根本的な教えとして、差別のない生命尊重の精神がここにある。

檀家の多くが寺から遠いせいか、妙光寺のお盆の墓参りは昔から八月一日、日中の暑さを避けて早朝暗いうちから、家族そろって十キロ近い道を歩いて寺に向かう、そんな光景が三十年くらい前まで続いていた。歩きが自動車になっても、早朝から家族そろっての墓参りの光景は、いまも変わることなく続いている。今年は日曜日と重なって、一層にぎやかになることだろう。

そんななかで「うちの隣の墓にはお参りする人がないのか、花もロウソク、線香も上がったことがない。だれの墓か知らないけど、いつも私が余分にもって来て、お参りしてるんですよ」という話をよく耳にする。なんとなく心がうれしくなるときだ。お供え物も、ビニールや缶、ビンを避けてもらえると、鳥がついばんだりして供養にもなるんですが…。

信心

「おしょろこも」五十年

土屋　清一さん（82歳）

お盆に先祖の精霊をお迎えする棚を「精霊棚」といい、位牌を仏壇から移して、素麺や数々の野菜をお供えする。畳一枚もある精霊棚を座敷にしつらえる農家もあれば、町のお宅では仏壇の前に飾る略式も多い。

この棚に敷く荒こもを「おしょろこも」（お精霊様のこも）と言って、水辺に生えるまこも（ガツボ）を編んで作る。農家の人は自分で編むが、たいがいはお盆前の市などで売っているものを買ってくる。

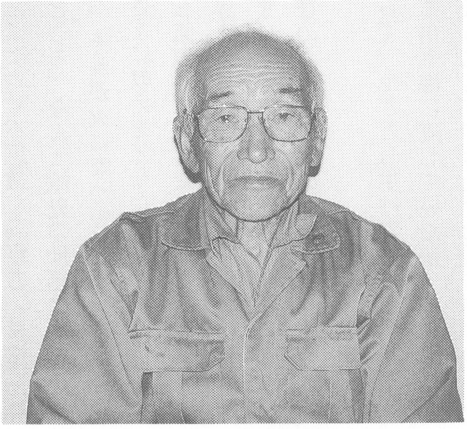
八月一日から始まる妙光寺のお盆に、このこもを毎年編んでくれるのが土屋清一さんだ。兵隊から戻って、当時あった前寺の住職に頼まれたのがきっかけで始まり、もう五十年になる。一度も欠かしていない。昔は田んぼの回りにいくらもあったまこもが、一時は用排水の護岸と除草剤で減って探すのに苦労した。いまは減反の休耕田が増えて、また手に入りやすくなった。

七月中旬にまこもを刈り、丸二日干した後選別してから、農作業の合間に数日かかって編み上げる。つなぎにビニールひもを使ったこともあるが締まらないので、やはり芯を抜いたまこもを叩いて、縄にしてから編む。「今の若いもんにはできないな」という。

幅九十、長さ百二十センチ程に仕上げたこもを、バイクの荷台にくくって三十日ころ届けてくれる。八月一日、寺ではこれを敷いた精霊棚で、お盆の施餓鬼法要が営まれる。

今も現役で四反弱の畑に夫婦で野菜を作り、売りに行くのは奥さんの仕事。土屋さんは毎日暗くなるまで農作業を続ける。どんなに忙しくても朝晩の仏壇参りを欠かすことはないが、冬以外に好きなゲートボールをやれないのがちょっと残念だと。

二人の娘は嫁ぎ、長男が内装業をやりながら田んぼをまかっている。しっかりした働き者の長男だ。



寺の動き

本堂工事報告他

本堂工事経過報告

三月の役員会議で決定した、設計変更を別刷りでお届けしています。面積が小さくなったことへの心残りはあるものの、回廊のついた木造の計画は、おおむね好評のようです。しかし延べ千㎡を越す木造寺院建築となるため、消防と設備関係、さらには自然公園法の規制がとても厳しく、その対応が大変です。

すでに二十社近い建設会社から受注申込があります。年内に設計を終え、来年早々に役員会議で厳正に業者選考し、五月着工の予定です。

資金勧募の状況は、六月十五日現在で左記の通りです

※寄付申込総額
二億二千百十六万九千五百円
※入金済み総額
一億五十万三千八百八十八円

不況の続くなかで、誠に心苦しい限りです。ご協力深く感謝申し上げます。

別紙でご案内した、新しいご本尊となる仏像を彫られる仏師を、住職と総代三名が面談のうえ、決定しました。大仏師の祖と仰がれ、藤原時代に活躍した「定朝」という仏師がいますが、その三十九代の流れをくむ、石川真水さんです。意欲、経験ともに溢れる五十才。幾人かの候補者のなかで、滋賀県の天台宗のご住職に紹介いただき、十分な話し合いのもとでお願いしました。詳しくは次回ご報告します。

工事に伴い、本堂前の松の移植ほか、境内の木々の移動が生じます。その際に必要となる大量の庭土を購入し、墓地の前に仮置きしました。寺の近くの造成工事で良質の土が出たものを、角田浜の石田皆蔵さんの配慮で格別に安価で求めることができました。

その他のご報告

護持会は別紙報告の通りです。今年度も例年同様の会費納入をお願いします。また団体参拝旅行は、参拝寺院の拝観料金が上がったりしたことで、前回のお知らせより若干高くなりました。ご了承ください。フェスティバル安穏が十年目です。壇信徒の皆さんの参加もお待ちします。

特別寄稿

前回の「妙の光」で癌告知について書きましたが、このたび植家で県内黒埼町の小林昇さん（五十三才）から、その体験が寄せられました。ご本人の了解をいただいて若干の修正を加え、紹介させていただきます。

二度の癌告知を受けて

小林　昇

私はさる平成五年十月、会社の定期検診で肺に異状があると診断され、県立ガンセンターで精密検査を受けました。そこで胸部外科の寺島先生より肺癌と告げられ、十二月同先生に手術していただき三週間の入院の後、暮れの二十七日に退院できました。早い治療で術後の経過もよく、本当に喜びました。

その後は順調に体力も回復し、平成六年四月より職場復帰をはたすことができました。そのうち仕事もマイペースを取り戻し、病気も忘れて仕事に遊びにと、病気前と同じような生活を繰り返す日々。そんな生活が続くうち、昨年八月ごろより少し体重が減ってきたような気がして、寺島先生に相談し精密検査を受けたのです。肺、腹等に異常なし。しかし今年二月に内視鏡検査を受け、異状が見つかって食道癌を告知されました。ショックでした。五年ほどの間に二度の癌告知です。頭の中は真っ白、もう勝負ありかと思ったのが本当のところです。

日をあらためて外科の田中先生の診断と説明によると、肺の手術が五年前なので食道の手術はできないとのこと。内科の治療を勧められて、秋山先生担当で化学療法による約三カ月の入院と診断がくだされました。三月十八日に入院、二十五日から治療が始まって、なんとも言葉に言い表せない苦しい日々が続きました。しかし家族をはじめ、兄、姉、親戚の方々の励ましで、なんとか苦痛を乗り越えることができ、先頃退院できたいま、こうしてペンを走らせています。

現在マスコミ等で癌の告知、癌と闘ういう言葉をよく耳にします。医師か

ら「あなたは〇〇癌です」と言われたときのショックは、はかりしれないものがあります。事実五年前のときも、頭の中が真っ白になり、どれほど涙したか。人前では強がりを言っても、心中は穏やかではありませんでした。

でも肺の手術は全身麻酔で行われたので痛みを感じることなく、手術後も痛み止めの薬のおかげで苦痛も少なくて済みました。経過が順調だったこともあり、そんな病気も忘れて、調子に乗り過ぎた気もします。しかしそれは気持ちをどこかへ向けて、忘れていたい思いがあったんです。それだけもう一度癌になったら終わりという考えが、常に心のうちにありました。そして五年が過ぎた今回、いやな予感が的中して食道癌を告知され、勝負あったとの思いが頭をかけめぐり、文字通りガツンときました。

現代の医学では、癌は不治の病ではないと言われます。しかし私には疑問です。これはあくまで早期発見、早期治療が前提の話です。発見が遅れ、他への移転があったら「手遅れでした」と、医師に告げられて終わりというのが普通です。これでいいのでしょうか。私はまだまだ癌という病気に人類は勝っていないと思います。癌が見つかっても百％治せるか、発生を抑える免疫

薬でもできてはじめて、癌は不治の病でないと言えると思うのです。

また、今回私は手術ができないとのことで、内科の化学療法を受けたわけですが、副作用による苦痛は言葉に言い表せない、想像をはるかに超えるものでした。それが一週間から十日も続き、こんなに苦しい思いを乗り越えないと生きていけないのか、何度思ったことでしょう。本当に苦しかった。先生は「日時が過ぎれば楽になるから頑張りましょう」と言われる。でもなかなか時計の針が進まない、どうにも苦しい日々が続いて、どうしようもなかった。「頑張れ昇！頑張れ昇！」何度も何度も自分に言い聞かせて、時の進むのを待ちました。どうにか二回目の抗癌剤を投与して十日ほど過ぎてから、少し気分が楽になってきて、あーあ、これで苦痛をなんとか乗り越えることができたかと、ようやく安心した

次第です。

このたびの入院治療にあたり、大勢の皆様方のお力添えと、家族の支えがあればこそここまでこれたと、心の中で手を合わせています。とくに妻の信子と、その親友の明美さん。二人は一日も欠かさず病院通いをしてくれました。本当に感謝の気持ちで、言葉もないくらいです。ありがとう。約二カ月の入院生活で十キロの体重を落としました。これから体力の立直しに何カ月要するのかわかりませんが、一日も早い社会復帰を目指したいと願っています。

またこの闘病生活で、私は神仏に残り何年かの生命を与えていただいたと思っています（自分勝手ですが）。でも人生八十年の生涯と言われる現在、この世に生を受けてまもなく、幼くして去る子もいれば、二十代、三十代でこれからというときに去っていく人もいます。これも神仏が与えた人生といえばそれまでですが、まことに不公平ではないかと言う気もしています。

ただひとつ、健康で人生を過ごし、病気になって回復の見込みがなければ、苦しい治療を長く受けるより、自然体で家族とお別れできるほうがどんなにか幸せかと、確信を持った入院生活でした。再三になりますが、家族はじめ親戚友人、大勢の皆様からの心温まる励ましとご支援をいただき、感謝の気持ちでいっぱいで、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

平成十一年六月

――寺の自然10――

雪割草の繁殖生態①

新潟西高校教諭　藤田　久

角田山頂に至る早春の宮前コースを行くと、ひょっこり雪割草が咲き乱れる自生地と出くわすことがある。そして花が終われば周囲の下草に埋もれ、人々の意識から忘れ去られてしまう。それは、また雪割草にとって〝盗掘の危機〟から解放される季節の到来でもある。

春がすぎたにもかかわらず、野外の雪割草に思いを寄せている人はあまりいないだろう。雪割草が成長・増殖する生活ぶりは書店に並ぶ多くの園芸雑誌に詳しい。しかし野外の生活となると、ほとんど調べられていない。かって寺泊高校赴任中「野外の繁殖生態」をテーマに、一年中山野に通った科学部の研究成果が得られ、知られていない雪割草の世界が判明した。

雪割草の繁殖方式

雪割草が子孫を増やすための繁殖のし方には、多くの植物と同じように二通りある。これには、花を咲かせて種子を造り、これを散布させる「有性繁殖」と、葉（葉面積）を拡大させ葉数を増やし、光と養分を吸収して冬芽を作っていく方式の「栄養繁殖」とがある。養分が十分余れば冬芽が複数作られて翌春の株立ちは、成長してさらに大きいものになる。

この二方式をもって鉢植え栽培すれば、あふれんばかりの花を咲かせ、葉をこんもりと茂らせることは、そう難しいことではない。ところが、野外の生活環境ではライバルの植物が多く、動物、昆虫にもねらわれているとなると話は別になる。

種子の行方

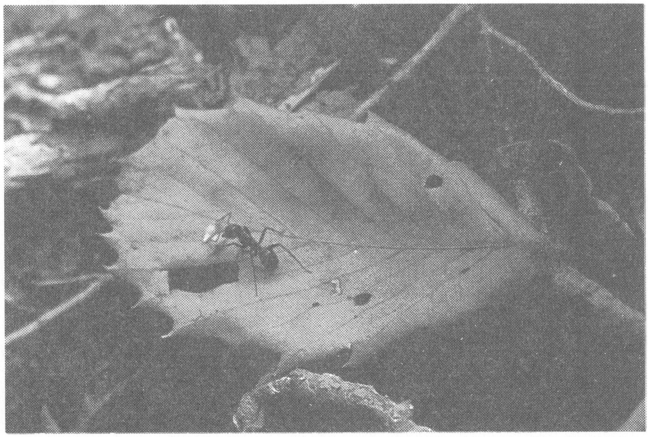
花が終ると、こんぺい糖のように尖った緑の種子をつける。やがて花柄を倒し、パラパラ株の周囲にうまく播き散らしていく。種子が大きいので地面に散らばる様子はよく観察されるのだが、しばらく期間を置いて見にいくと種子はきれいさっぱりに消えている。このことは、アリが運び出すからだと本に書かれていて「アリ散布」ともいう。

はたしてどんなアリが現われるのか興味をもち、林内に腰を下ろして観察を試みた。種子を落葉の上に並べておき、待てどもアリは現われず簡単に観察させてもらえなかった。そこでシャーレにろ紙を敷き、種子を置いて一晩たって調べると確かに種子数が減っていた。

種子は2～3ミリの大きさで、細かいアリなら運べないと思い、大形のアリを探してアリの通り道に並べておいた。するとうまくくわえて運ぶアリが、ようやく観察できた。これはムネアカオオアリというクロアリだった。ただ、どのアリも種子に関心を示して運ぶというものではなかったのは予想外だった。

種子が消える秘密

寺泊の山林で、幹の根元に空いた穴の内に雪割草やカタクリの実生を見つけたことがある。普通、実生は親株が種子をばらまく範囲に生じるはずである。だからアリに巣穴まで運ばれた後に発芽したものであろう。このことから種子はアリによって食べられてはいないことがわかる。



種子を運ぶアリ

種子に白っぽい部分がつけねにあり、〝エライオソーム〟という名前がつけられている。ここには脂肪の成分が含まれていて、これにアリが誘因されて好んで食べ、種子本体の方は巣穴からポイ捨てという習性があるようだ。

いいかえれば種子はアリに運んでもらうため、アリの好物で誘惑していることになる。そして親株から遠く離れた場所に運ばれ、そこで発芽に成功すれば子孫を拡大するチャンスが訪れることになる。また運良く、運ばれた途中に忘れられて放置される場合もありうる。したがって雪割草はまるで昆虫の利用をたくらんでいるかのようにも思える。

しかし、もともと自然はそう甘いものではない。先に試みた実験のシャー

レに、ごく小さな種子のかけらに気づいた。もしや、これは種子が食べられた痕跡でないかという疑問から、次は食べに来る犯人探しに移っていった。

昼間の張り込みでは何も現われず、とうとう生徒達とナイトウォッチングをするはめになった。そのうち暗闇の林内から、「虫がいる！」という発見者の叫び声。ライトで足元を照らしてかけつけると、それは長い触覚をもった〝カマドウマ〟という地表を活動する昆虫だった。さっそく小ビンに種子といっしょにしておくと、やはり種子は殻だけになっていた。

初めはノネズミと予想し、ネズミの捕獲を試み胃に残った食物まで調べたこともあったが、手がかりは得られなかった。カマドウマなら昼間、種類が二種いて落葉の上を動きまわることは知っていたのだが、まさか食害の犯人だとは気がつかなかった。これだけではないだろうが、種子が消えるもう一つの秘密を解くことができた。しかも本には書かれていなかった新発見だっただけに、生徒と共に喜びあったことが懐かしく思い出される。こうして昆虫と雪割草の興味ある関係をうかがい知ることができた。

フェスティバルにご参加ください

恒例夏のフェスティバル安穏を、八月二十八、九日に開催します。本当に早いもので、もう十年目になります。この間に少子高齢化はますます進み、高齢者介護と葬送の社会的関心が幅広いものになりました。この十年間を踏まえて、これからの安穏廟、そして妙光寺の関わりを考えます。

ゲストは高齢社会問題に詳しい、評論家の樋口恵子さん。永代供養墓では、安穏廟の先輩格にあたる「女の碑の会」代表の谷嘉代子さん。それに各宗派の僧侶がボランティアで集まって、電話相談を受けている「仏教情報センター」が東京にあります。その事務局長で、真言宗明治寺の住職草野栄應さん。ことに樋口さん、谷さんのお二人は二回目のお招きです。

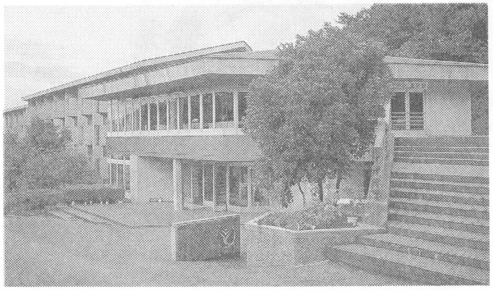
法要は昨年に引き続き、日蓮宗布教研修所の若い研修生が十二名、研修目的で参加します。さらにチベット僧侶にも加わっていただきますので、二十名を越す大法要となります。音楽も久かたぶりの太鼓と琴で、山に響くことでしょう。

今年は宿舎がホテル形式のリゾートマンションに変わります（写真）。海水浴シーズンが終わっているため、特別に提供していただきました。これまで以上にゆったり過ごせると思います。来年が本堂工事中のため規模縮小になりますので、ご都合つけてお出かけ下さい。

法要で灯す大ロウソクの献灯をお願いします。毎年百本以上並んで壮観です。一本三千五百円、それぞれにお名前を入れて灯します。年会費の送金と一緒でも結構ですが、その旨通信欄にご記入願います。その年会費を、同封の振込用紙で郵便局からご送金下さい。

妙光寺のお盆の墓参りは、八月一日です。個人的に墓前での読経を希望される方は、朝六時から十時まで随時受け付けています。今年は日曜で混雑しますから、朝の時間帯をお勧めします。

近々会員の方へのアンケートを予定しています。届きましたらご協力おねがいします。



寺庭から

娘たちをとおして

私ごとで恐縮ですが、四人の娘たちはキリスト教系の私立学校に通学しています。お寺の娘なのに、とひんしゅくを買うのを覚悟のうえです。本来ならば仏教系の学校を選ぶべきなのでしょうが、新潟にはありません。

長女が六年生だった頃、保育園からずっと一緒の小さな集団になじめなくなり、人間関係で悩んでいたことがきっかけです。当時の担任の先生とも話し合い、背に腹はかえられぬ思いでの決断でした。

それから長女は新しい友人や先生と出会い、その中に希望を見出だしたかのように半年を過ぎる頃から、みるみる明るく変わっていきました。そんな姉の様子を見ていたのか、あとの三人も長女と同じ学校に行きたいと主張したのです。

親として貯金のすべてをはたかなければならない厳しい現実に直面していますが、娘たちを通して、知らなかった世界を少しだけ知ることが出来た思いでいます。そしてそのことは、私自身が宗教に対するいろいろなことを考えるきっかけになっています。

お寺という殿堂の中で十五年も暮らしていながら、恥ずかしいことに自分の中の仏教徒としての自覚はあまりにもおそまつでした。それは日々のあわただしい暮らしに埋没して余裕がなかったせいもあるし、お経の言葉が分かりにくいということもあります。また私が育ってきた過程には宗教のことを学ぶ機会がなかったこともあるでしょう。

以前東南アジアに旅行した時、人々の暮らしの中心にそれぞれの宗教がおかれていること、とくに小さな子供や若い人が自然に祈りを捧げていることに強い羨望を感じました。娘の担任をしていただいているシスターとお話をした時にも、同じような感動をおぼえました。

ようやく、信仰をもち祈りの中に自分の存在することの意味や進むべき道を見いだしたいと願っている自分に気がつきました。長い間かかってやっとこの気持ちにたどり着き、遅ればせながら仏教を学ぼうと思っています。十五年前に結婚式で授かったお数珠を、持つにふさわしい心になること、そうしてあと半分の人生を安らかな気持ちで過ごしたいと思うこの頃です。

小川なぎさ

行事案内

七月九日～十六日
東京方面お盆お経
住職がお伺いします。日程的に回りきれない場合は秋のお彼岸になりますので、ご了承ください。

八月一日（日）
お盆墓参り、施餓鬼法要
午前六時　墓お経受付開始
〃　十時半　安穏廟法要
〃　十一時　施餓鬼法要
昼　十二時　おとき
午後一時　説教

七月中に世話人が各家に護持会費、施餓鬼塔婆供養料をいただきに回ります。県外、新潟市等遠方の方は郵便振り替えか、この日受付にお持ちください。

八月十三～十六日
お盆棚経
例年通り住職と鎌田、それにお手伝いのお上人が手分けして全檀家に伺います。何日か知りたい方は八月十日過ぎに電話ください。予定をお知らせします。新潟地区は早めになりますので、直接ご連絡します。

八月十九日（木）
岩屋七面宮祭礼
午前十時半　本堂で法要、お加持
岩屋へ移動、法要
昼十二時　参詣者に赤飯供養
午後一時　説教

八月二十八・九日（土・日）
第十回フェスティバル安穏
安穏廟の供養祭。詳細はパンフで。

九月二十三日（祭日）
秋季彼岸会法要
午前十時半　安穏廟法要
〃　十一時　彼岸中日法要
昼　十二時　おとき
午後一時　説教

あとがき

早いもので関東はお盆の時期を迎えます。季節の移り変わりを一番感じるのが、田んぼの稲の成長です。ついこのあいだ田植えがあって、早苗がみずみずしかったのに、今は青々と成長した稲が爽やかな風にゆれています。これから花が咲き穂がでて、お盆が過ぎれば稲刈りもすぐ。そうなるともう秋です。日々のうつろいの速さを痛感しますが、それだけに一日一日の大切さを思わずにはいられません。今回の小林さんからの文章、そんな重みをもって拝見しました。

不況ともあいまって暗い話題の多い昨今ですが、本堂の新しくなるのが楽しみだ、と言っていただくとほっとします。梅雨時の健康管理にお気をつけ下さい。妙光寺史話はお休みしました。（小川）